

令和3年9月3日

京口門だより No.95

世界的な気候不順が続くうえに、新型コロナウイルス感染症の変異株の流行と不自由で不快な状況が続いています。爽やかな秋の空と涼しい風が心から恋しくなります。わが国特有の四季の変化が薄れています。

そうしたなかでまた不都合な話を持ち出して申しわけないのですが、やはり知識として知っておいていただいた方が良くと思い、「医原性副腎不全」ということについて触れてみたいと思います。

医原性というのは実際の医療を行なった結果として起こってくる現象で、多くはわれわれにとって都合の悪い状態をもたらすことを言うことが多いと思われます。副腎不全というのは、われわれの身体の誰にでもある副腎という臓器がうまく働かなくなることを意味します。

副腎という小さく薄い臓器は、ちょうど両方の腎臓の上部にくっついていて、われわれにとって重要な内分泌ホルモンを作りだしている臓器です。副腎には二層あって、副腎皮質ホルモンと副腎髄質ホルモンという二種類のホルモンを分泌しています。副腎皮質ホルモンはストレスに対して体を守り、糖や血圧の調節をおこない、体の電解質や水分の調節をしています。副腎髄質ホルモンは心臓や血管の働きを調節するように作用します。そしてこれらのホルモンは脳下垂体という脳の中にあるホルモン分泌調節器官から、多ければ作るのを止め、少なければ多く作るように命令されるという調節を受けているのです。これをフィードバック機構と言います。つまり脳からしっかりと監視・調整されているのです。

難しい話になっていますが、実はこの副腎のホルモンが薬として製造され、多くの病気に使われるようになってきました。とくに副腎皮質ホルモンはステロイド剤として喘息、アトピー性皮膚炎、鼻炎など、呼吸器の病気、皮膚病、耳鼻科のアレルギー性の病気、あるいは関節の病気などにしばしば使われます。

もともと我々の身体の中にあるホルモンを外から飲み薬、塗り薬、吸入薬、注射薬として与えますから、体内の副腎の臓器が自分で作ることを止めてしまいます。脳の調節器官も過剰になったホルモンはもう作るなと命令します。そういう状態が長く続くと、副腎の臓器は次第に萎縮してしまっていて働かなくなります。それを「医原性副腎不全」と言います。恐いのは外から与える副腎皮質

ホルモン(ステロイド剤)を急に止めると、それまで行われていた身体の調節機構がストップしていますから、大変な現象が起きてきます。急に止めてはなりません、少しずつ止めてゆく方法をとる必要があります。またこれまで塗り薬や吸入薬のステロイドは副作用が少ないと言われていましたが、決してそうではないことが分ってきました。それが「医原性副腎不全」なのです。それを防ぐのに漢方薬が役に立つことがあります。

